

N R P A 専門職がみた日本の高齢化問題に対応する

N R A J プログラミング発表の背景と経緯

－2009 N R P A コンgressの教育セッション発表から－

○ 山崎律子〔余暇問題研究所〕、上野 幸、廣田治久、高橋和敏〔R〕

キーワード：N R P A、N R A J、高齢者プログラミング

I はじめに

本報告は、2009年10月13日（水）から17日（土）にかけてユタ州ソルトレイクシティにおいて開催されたN R P A コンgress（全米レクリエーション・公園協会年次大会）の教育セッションで発表に至った主に背景と経緯およびN R P A 専門職の見方を報告するものである。

この報告の目的は、次の通りである。すなわち、大別すると①発表に至った経緯の理解と関心の喚起、②発表内容概略報告、③N R P A 専門職がみた高齢化問題に対応するN R A J プログラミングおよびその見方の理解等の3点に集約できよう。

II 発表に至る経緯

1. N R P A と N R A J（日本レクリエーション協会）との相違

両国の協会は、その組織と使命はおおむね共通するが、N R P A は”すべての人々のQ O Lを高める公園、レクリエーション、環境保護を促進する“として、N R A J は”遊びの充実や社会的課題に挑戦し”とある。N R P A は運動促進のターゲットを上げているが、N R A J は公園には触れないでやや抽象的である。しかしそれらの組織構成は全く異なっている。N R P A は、従来既存のレクリエーション協会、公園協会、動物園協会、水族館協会、博物館協会、図書館協会、観光協会など関連団体の全米組織統合体としての機能がある。しかし、N R A J は、地方協会、加盟団体（主にスポーツ団体や関連領域団体）を傘下においている。会員は、N R P A の場合は月刊誌購入個人会員を主体にしている。

N R A J の場合は公認指導者を会員としているが、指導者登録費、更新料などを徴収していて、月刊誌は無料で配布している。

それらの組織構成は、N R P A の場合は、レクリエーション・公園行政として一体化されて公共行政に位置づけされていて、その職員はほとんどが4年生大学以上の専門教育を受けてきた人材を有する。したがって専門職としての地位を有する。それらの人たちがN R P A の会員になり、それぞれの専門興味のもとにランチあるいはセクションに属している。もちろん大学などの教育・研究者も一つのランチ（たとえばS P R E）に属している。それに比べN R A J の場合は、公認指導者といっても、他に職をもち、短期講習を受けたいわばボランティアリーダーであって、レクリエーション専門職を活用しきれていない。根本的に大きな相違は、N R P A は地域に母体があることを明確にしている。たとえば役員（理事会・評議員会構成員）は、各地方地域レクリエーション委員会代表（市民代表として）と各地区からの専門職がなっている。一方N R A J は、地方協会代表、職域代表、学識経験者となっていて、直接地域の市民代表とは接点がない。

2. 発表するまでの経緯

そもそもアメリカ国内の年次大会にNRAJが代表を派遣して出席することになったことは、NRPAとNRAJが人事、情報などの相互交流協定（レクリエーション運動の五十年・日レク協・1998・267～268p）を1997年10月に開催されたボルチモアでのNRPAコンGRESSにおいて、元本学会江橋慎四郎会長とNRPA側の当時のジーン・タイズ事務総長の実質的尽力もあり、議定書に調印されたときからであった。

それ以来主に両国の年次大会に3名ずつの公式代表を派遣し合ってきた。したがってここ数年来余暇問題研究所がこの相互交流に関わってきて、現在も継続している。

前述した相違を乗り越えて相互交流を継続してきた原動力は、NRPAの場合には“国際委員会”があり、各国からの代表と共に日本からも出席していたが、ここ3～4年以来から国際化に伴いアメリカでも国際交流への理解が増してきて（周知の通り、意外にアメリカ人は国内志向が多い）日米共同で発表の機会を得た。

Ⅲ発表の概要

発表は、10月16日（金）、午前10時15分から11時30分まで、討議を入れて75分間行われた。発表は山崎、その補佐として廣田が担当し、アメリカ側から司会役のロバート・ホール氏（氏は、元NRPA会長で、1996年から代表の一人として毎年NRAJ全国大会に出席している）がなった。

発表概要は次の通りである。

- ① 日本における高齢化の現状、② NRAJの高齢化への対応高齢者プログラミング、③ 公認指導者養成の現状と加盟団体構成員の活動、④ 各エージェントとして日本方式を原則的に採用できるか？－討議－、⑤ むすび

Ⅳ考察

今回の発表に至った背景とその経緯を考えると、同じような分野の相互交流といっても、国情、言葉の相違はもちろん、組織のあり方や機能の仕方など大きな相違があり、その実現は容易ではなかったことを実感した。しかし、国際化した世界にあっては、この分野においても積極的に交流を促進していく必要があると認識した。

さらに、日本においてはごく普通のこととして処理していることも、見方を変えると斬新的かつ効果的と思われる事柄もあると、再認識するに至った。

Ⅴむすび

この小さな国際的発表を無事行われたことは、今さらながら、システム構築はもちろん重要であるが、それを運用する人材（今回も来日経験者たちの協力や尽力があった）の有無が成否の鍵を握っていることも確信できた。それと同時に、レジャー・レクリエーションの分野でも内向き志向を変えなければ、今後の社会的貢献は果たしえないことも理解された。